

魯迅における欧化の文法¹ —— “的” “地” の使い分けを手がかりに ——

胡 蓉

0. はじめに

中国現代史の発端である「五・四」運動の言語面での一大功績は、中国語の「言文一致」を促したことにあるといわれる。「言文一致」とは、つまり、それまでの口語と不一致な書面語である文言文に反対し、新しい書面語としての、口語との一致を目標とする白話文の興起を指して言っている。²「五・四」以来、白話文は発展の道をたどる。その発展にあずかって、力のあった要素として、第一に旧白話の伝統、第二に文言文の伝統、第三に外国語に基づく表現の摂取があげられると指摘されている。³ 旧白話とは明清の白話小説のことである。本稿は、この第三の力とされている「外国語に基づく表現の摂取」について考えていきたい。

「外国語に基づく表現」とは、外国語（日本語も含まれる）の語彙・語法・言い回しなどのことである。それらの影響を受けて発達した、中国語の新しい語彙、文体や文法のことを便宜上一括して、「欧化語法」と呼ぶ。⁴

魯迅の《狂人日記》は白話によって書かれた新文学の成功したものの第一作であるとされている。彼は、中国の文章を改革するために、外国語に基づく表現を積極的に取り入れることの必要性をしばしば主張している。彼は1931年、「翻訳についての通信」（《二心集》）⁵の中で次のように述べている。「訳本というのは、たんにあたらしい内容を輸入するばかりでなく、新しい表現法をも輸入するものである」、「中国の文章あるいは言葉は、その法則があまりにも不精密です……この文法の不精密ということは思考方法の不精密ということを証明します。

（中略）この病気を治療するためには、私は次々と苦いものを食べ、異様な句法を詰め込んでいくしかない、古いものでも、他省や他県のものでも、外国のものでも詰め込むより仕方が無いと思います。（中略）後になれば、それが自分自身のものになっています。遠い例としては、たとえば日本ですが、彼らの文

章には欧化した文法がきわめてあたりまえのものになっています。」

魯迅がここで言う中国語の語法の不精密とは何を指しているのだろうか。「欧化語彙」の定義として、本稿では、前述したように、欧化語彙、欧化風の言い回し、欧化の文法とを便宜上一括しての呼び名だとしているが、魯迅がいう「日本語」のなかの「欧化した文法」とは具体的に何を指しているのだろうか。筆者は考えるに、19世紀半ばから20世紀初頭まで、日本は中国より一足先に外国の新しい文化や思想を自国に輸入していた。そのときに、外国からの新しいものに対応する新しい言葉、つまり、外来語をその当時の知識人達がたくさん作った。「哲学」や「経済」などの言葉がよく知られた例である。また、文法の精密化（欧化の文法）も含まれているであろう。魯迅はこうしたことを指して言っている。中国語において、日本語と同じように欧化の語彙（特に日本語からの借用）がたくさん取り入れられる動きがあった。のみならず、それに加えて、文法の欧化の試みも為されていた。本稿は欧化語彙は調査の対象とせず、欧化の文法を中心に調べていく。

1. 欧化の文法

1.1 欧化の文法の分類

文法の欧化について、本稿での基本的な考え方を王力に基づく。王力は欧化語彙、欧化風の言い回し、欧化の文法とをはっきり区別すべきだとした上で、⁶ 欧化の文法を次のように分類している。⁷

- ① 複音節語の創出 「これは語の意味から考えると、語彙の欧化であるが、語の音声上のことから考えると、語法の欧化である」、と王力は説く
- ② 主語及び“是”による述語文の増加
- ③ 文の複雑化
- ④ 可能、受身、記号の欧化
- ⑤ 連結成分の欧化
- ⑥ 新しい代名詞と新しい数量詞の使い方
- ⑦ 新しい省略法、倒置法、挿入法及びその他

本稿は上に挙げられた欧化の文法を調べる。その第一歩として、④の「記号の欧化」に属する連体修飾語の接辞“的”、つまり、形容詞的修飾の記号としての“的”と、連用修飾語の接辞“地”、すなわち、副詞的修飾の記号としての“地”

の使い分けについて調べていく。

1.2 「五・四」までの“的”の使い方について

「五・四」までの“的”の使い方について、王力は以下のように記している。⁸

宋代	「次品」の後附号：“底”	「末品」の後附号：“地”
元代	“的”の用法が現れる	
明代以降	“的”“地”“底”の区別がなくなり、“的”だけになる。	

王力によると、「次品」の接尾辞としての“的”と「末品」の接尾辞としての“的”とは、宋代の文章上において区別があった。⁹前者は“底”で表し、後者は“地”で表していた（《朱子语录》などに見られる）。¹⁰“的”が使われるようになったのはむしろ“底”“地”より遅い。元曲で始めて使われるようになったのではないかという。¹¹ところが、明以後の小説になると、もっぱら“的”が使われるようになり、“底”“地”が却って使われなくなってしまった。また、現代の文章は、とりわけ「五・四」以後、欧文の影響を受けて、¹²形容詞的修飾と副詞的修飾には異なる記号を付けるべきだという考えが生まれ、“地”が再び使われ、“的”と“地”の使い分けが始まった。というのは、例えば、それまでに同じく“理智的思考”と書いたものが、それが果たして「理性的な考え」という意味なのか、それとも「理性的に考える」という意味なのか、前後の文脈とあわせて考えないと区別がつかなかった。この文法的に不精密なところを改めようと、“的”と“地”の使い分けが提唱された。しかし、このような使い分けは書面においてしか分からない。口頭において、その読み方は同じく“de”であり、区別が無い。他にも、同じ例として、人称代名詞では、“他”（すべての人称代名詞として使われていた）から同じ読み方“ta”で、“他”（彼）、“她”（彼女）、“它”（人類以外のもの）の三つに分化されたという欧化の文法に属するものがある。

2.1 魯迅における“的”“地”の使い方

“的”“地”の使い方を調べるのには、本稿では主に魯迅の作品をその手がかりとする。なぜなら、魯迅は《狂人日記》¹³という白話文の最初の新文学の作品を世に示し、常に中国現代文壇の中心的位置に属し、常に先頭にたって中国現代文学を推進した作家だからである。

魯迅における“的”“地”の使い方を調べるにあたっては、以下のような作品を用いた。《呐喊》《彷徨》《故事新編》《墳》《热风》《朝花夕拾》《偽自由書》《花邊文學》《且介亭雜文》《華蓋集》《二心集》《野草》《而已集》《三閑集》。¹⁴

前述したように、「五・四」以前は“的”の使い分けは無かった。その文中での役割は主に以下の三つに分けられる。

- ① 領属性の定語（例：我的朋友 私の友達）
- ② 形容詞の記号（例：很贵的書 貴い本）
- ③ 副詞の記号（例：非常仔細的檢查 細かく調べる）

「五・四」以後、欧文の影響で、以上の三種類に対してそれぞれ異なった記号を付けるべきだと当時の知識人によって議論されるようになる。特に問題になったのは、②と③、つまり、形容詞と副詞の記号としての使い分けであった。結論として、前者は“的”をそのまま受け継ぎ、後者は“地”によって区別することとなる。因みに、①と②の使い分けについて、当時正反対の意見が存在していた。一つは、領属性の定語の場合には“底”を用い、形容詞の記号の場合には“的”を使うという意見と、もう一つはこれと正反対な使い方を主張する意見であった。しかし、原因は分からないが、“底”を取り入れる使い方に意見が統一されず、領属性の定語と形容詞の記号の両方に“的”がそのまま継承されることになる。¹⁵

以上のことを踏まえて、本稿は魯迅の“的”についての使い方について、問題となっていた副詞の記号に限定してみる。これは作品の年代によって、その使い方に差が出てくるのではないかと考えたからである。というのは、欧化の文法を文章に取り入れることをしばしば主張していた魯迅は、形容詞の記号と副詞の記号とをやはり意識して使い分けたのかどうか。また、それは年代的にどうなっていたのかを調べることによって、魯迅にとっての欧化の文法観について垣間見ることができるのではないかと考えたからである。未分化するときの“的”と分化したあとの“地”の、その使われた回数を調査し、以下に表にまとめた。

まず、扱う魯迅の作品は、その文体や文章の長短によって、“的”“地”の数に差が生じることを考慮して、小説と雑文の二大部類に分けることにした。《朝花夕拾》は散文集であるが、本稿では雑文の部に分類した。また、表の上に文集名を記し、その文集中に収められている作品を年代順に並べた。年代はその実際に書かれた時期である。¹⁶ 作品名の横には、副詞の記号として使われた“的”

“地”の回数を示した。作品名に関して、雑文集の各篇は短いものが多いため、年代的にまとまりのあるものはその年代ごとの具体的な作品名を記さず、作品の篇数だけを示し、総合的に使用された“的”“地”の回数を記した。

2.2 表

小説

1918-1922 呐喊

年代	書名	的	地
1918.4	狂人日记	14	0
1919.3	孔乙己	10	1
1919.4	药	30	2
1919.6	明天	26	2
1919.11	一件小事	5	1
1920.8	风波	17	7
1920.10	头发的故事	7	0
1921.1	故乡	19	3
1921.12-1922.2	阿Q正传	151	2
1922.6	白光	45	2
1922.6	端午节	20	1
1922.10	兔和猫	15	0
1922.10	鸭的喜剧	10	0
1922.10	社戏	33	2

雑文

1918—1926 坟

年代	書名	的	地
1918—1919	《我之节烈观》《我们怎样做父亲》2篇	13	0
1923.11	宋民间之所谓小说及其后来	2	0
1923.12	娜拉走后怎样	1	12
1924	《未有天才之前》等4篇	6	12
1925	《看镜有感》等11篇	7	31
1926	《题记》《写在坟后面》2篇	0	7

雜文

1918—1925 热风

年代	書名	的	地
1918.9—1919.11	随感录25—66	23	1
1921.10	智识即罪恶	7	0
1921.11	事实胜于雄辩	1	0
1922	《估《学衡》》等11篇	5	0
1924.1	望勿“纠正”	1	1
1925. 11	题记	0	1

小說

1924—1925 彷徨

年代	書名	的	地
1924.2	幸福的家庭	23	0
1924.2	祝福	54	2
1924.2	在就楼上	31	3
1924.3	肥皂	34	1
1925.2	长明灯	1	36
1925.3	示众	0	10
1925.5	高老夫子	0	26
1925.10	孤独者	4	56
1925.10	伤逝	0	55
1925.11	弟兄	2	36
1925.11	离婚	4	16

小說

1922—1936 故事新编

年代	書名	的	地
1922.11	补天	35	2
1926.10	铸剑	3	68
1926.12	奔月	3	29
1934.8	非攻	35	0
1935.11	理水	31	0
1935.12	起死	4	3

1935.12	采薇	48	1
1936.1	出关	48	1

1927—1930 三闲集

年代	書名	的	地
1927	《无声的中国》等8篇	0	15
1928	《路》等14篇	1	16
1929	《现今的新文学的概观》等8篇	0	10
1930	《流氓的变迁》等4篇	1	5

1925-1934

年代	書名	的	地
1924.9—1926.4	野草（25篇）	1	94
1925.1—12	华盖集（33篇）	13	44
1926.2—11	朝花夕拾（11篇）	0	83
1927—1928	而已集（31篇）	6	39
1933.1—7	伪自由书（60篇）	41	15
1934.1—11	花边文学（32篇）	49	6
1934.3—12	且介亭杂文（37篇）	75	2

1930-1932 二心集

年代	書名	的	地
1930	《“硬译”与“文学的阶级性”》等11篇	3	55
1931.2	关与《唐三藏取经诗话》的版本	0	0
1931.4	柔石小传	0	0
1931.4	中国无产阶级革命文学和前驱的血	0	2
1931.3	黑暗中国的文艺界的现状	0	4
1931.10	上海文艺之一瞥	7	3
1931.6	一八艺社习作展览会小引	0	1
1931.9	答文艺新闻社问	0	0
1931.10	“民族主义文学”的任务和运命	6	0
1931.12	沉滓的泛起	1	0
1931.10	以脚报国	0	0
1931.10	唐朝的钉梢	0	0

1931.9	《夏娃日记》小引	0	0
1931.11	新的“女将”	0	0
1931.11	宣传与做戏	0	0
1931.12	知难行难	3	0
1931.12	几条“顺”的翻译	0	1
1931.12	风马牛	2	0
1932.1	再来一条“顺”的翻译	1	0
1932.1	中华民国的新“堂·吉柯德”们	1	0
1931.11	《野草》英文译本序	0	0
1932.1	“智识劳动者”万岁	0	0
1931.12	“友邦惊诧”论	0	0
1932.1	答中学生杂志社问	0	0
1932.1	答北斗杂志社问	0	0
1932.1	关与小说题材的通信（并Y及来信）	0	0
1931.12	关与翻译的通信	7	2
1932.4	做古文和做好人的秘诀	1	2

2.3 表の分析

以上の表の特徴を次のように検討し分析した。

I 1918—1923年 未分化の“的”がほとんどを占めている

この時期に、魯迅は主に雑文集《热风》と小説集《呐喊》を著した。“的”“地”の使い方についてみると、例えば、《狂人日记》において、“的”が14回使われているのに対して、“地”は一回も使われていない。また、《孔乙己》では、“的”が10回使われているのに、“地”は一回しか使われていない。ほかの作品も同様に“的”のほうが著しく使われた回数が多い。

具体例は以下の通りである。

《狂人日记》における“的”の用例：

イ. “不要乱想。静静的养几天，就好了。”

（「おかしいことを考えないで、静かに何日か療養すればよくなりますよ。」）

ロ. 他也毫不奇怪，不住的点头。

(彼もちっとも怪しまず、しきりに頷いている。)

ハ. 格外和气的的对他说, (とりわけ優しく彼に言った、)

《孔乙己》のなかの“的”の用例：

イ. 热热的喝了休息 (熱々のうちに飲んで休む)

ロ. 他们又故意的高声嚷道, “你一定又偷了人家的东西了!”

(彼らはまたわざと大きな声で叫んだ、「あなたはきっとまた人のものを盗んだだろう」と)

ハ. 掌柜也不再问, 仍然慢慢的算他的帐。

(店主は更に聞くことも無く、やはりゆっくりと彼の勘定をする。)

《孔乙己》のなかの“地”の用例：

イ. 慢慢地坐喝。(ゆっくり座って飲む)

以上の例を見てみると、“的”は、いずれも動詞の前にあり、動作を修飾する副詞の接尾辞として用いられている。すなわち、形容詞の接尾辞としての“的”との使い分けが施されていない用法である。上の例文でもっとも対照的な例は、“慢慢的算他的帐”と“慢慢地坐喝”である。同じく「ゆっくりと」何かをするという表現であるにもかかわらず、“的”と“地”との両方の用法が示されている。

II 1924—1926年 “的”“地”の使い方が混在している

魯迅はこの時期において、主に小説集《彷徨》、雑文集《坟》の一部、《华盖集》《朝花夕拾》《野草》を著した。《彷徨》に収められている作品を表で見ると、1925年を境に、“的”“地”の使われた回数が逆転していることが分かる。例えば、1924年5月に書かれた《在酒楼上》では、“的”が33回、“地”が3回使われたことに対して、1925年3月に書かれた《高老夫子》では、“的”が0で、“地”は26回使われていた。雑文の表を見ても、同じような傾向があるように思われる。ただし、まだ完全に統一されたとはいえない。

具体例は以下の通りである。

《在酒楼上》のなかの“的”の用例：

イ. 渐渐的感到孤独 (徐々に孤独を感じ始めた)

ロ. 同时也就吃惊的站起来。(同時にまたびっくりして立ち上がった。)

- ハ. 但当他缓缓的四顾的时候
(しかし彼がゆっくりとあたりを見回したとき)

《在酒楼上》のなかの“地”の用例：

- イ. 我这时又忽地想到这里积雪的滋润,
(私はこのときまた急にここの積雪の潤いを思い出していた)
- ロ. 眼睛(中略)忽地闪出我在学校时代常常看见的射人的光来。
(ふとその目から、私が学校時代にいつも見慣れていた人を射竦めるような光を放った。)
- ハ. 又何必明知故犯的去使人暗暗地不快呢?
(またどうしてわざと人を暗に不快にさせる必要があるだろうか?)

《高老夫子》のなかの“地”の用例：

- イ. 又不给好好地医治 (またしっかりと治してくれない)
- ロ. 瞪着眼睛一字一字地看下去 (目を見張って一字一字を読んでいく)
- ハ. 黄三热心地问 (黄三さんが熱心に聞いてきた)

以上の例のように、《在酒楼上》において、副詞の接尾辞として“地”がここで記した三つの用例だけに限られているのに対して、《高老夫子》では副詞の接尾辞として“的”が一度も使われていない。

Ⅲ 1927-1931年 “的”“地” 区別され、用法が統一される

この時期に、魯迅は主に《三闲集》を著している。表で分かるように、“的”“地”の使い分けが統一され、定着している感がある。

“的”の用例：

- イ. 空空洞洞的争, 实在只有两面自己心里明白 (《扁》1928年)
訳文① (内容に乏しい論争は、その実自分にしか分からない)
訳文② (無内容的に議論しても、その実自分にしか分からない)
- ロ. 但大老爷要打斗殴犯人的屁股时, 皂隶来一五一十的打。
(《新月社批评家的任务》1930年)
(しかし役人が犯人のお尻を叩きたいとき、その配下が一つ一つきちんと叩いていく)

《无声的中国》（1927年）のなかの“地”の用例：

- イ. 他们还比较地能够说些要说的话
（彼らはまだ比較的言いたいことが言える）
- ロ. 将自己的思想，感情直白地说出来
（自らの思想、感情をストレートに表現する）
- ハ. 大胆地说话，勇敢地进行（大胆に喋り、勇敢に行動する）

以上の用例で、“空空洞洞的争”という一文が二通りの訳文になると考えられ、ここに記した。つまり、副詞的修飾とも形容詞的修飾とも取れるのである。このような用例はほかにもいくつかあって、本稿ではみな副詞接尾辞としての“的”の数に入れることにした。《三闲集》において、副詞接尾辞として使われた“的”の用例は以上に示した三例だけである。

また以下のように“底”の用法も見られる。

- a. 那是属于历史底的了（《我和《语丝》的始终》1930年）
（それは歴史的なものに属するだろう）
- b. 剩下来的内容一定是很革命底了罢（《文艺与革命》1928年）
（残った思想内容は必ずとても革命的なものであろう）

“底”の用法について、魯迅の文章では、以上の例にあるような“历史底的”“很革命底了”の用法は、それまでにほとんど無かったのに対して、1928年から1931年にかけて多く見られる。

IV 1931—1935年 再び未分化の“的”に戻っている

この時期に、魯迅は主に小説集《故事新编》、雑文集《伪自由书》《花边文学》《且介亭杂文》《二心集》を著している。一旦定着しているように見えた“的”“地”の使い方が再び初期のそれに逆戻りしている。《故事新编》の表を参考にすると、1926年の作品と1934年との作品では、“的”“地”の回数が逆転していることが分かる。

具体例は以下の通りである。

《铸剑》の中の“地”の用例：

- イ. 他轻轻地叱了几声（彼は小さな声で何回か叱った）
- ロ. 他默默地立在暗中（彼は黙って暗闇の中に立っていた）

ハ. 日日夜夜地锻炼 (日夜休まず鍛えた)

《非攻》のなかの“的”の用例：

- イ. 和气的问到 (やさしく聞いた)
- ロ. 就规规矩矩的站定 (礼儀正しく立ち止まる)
- ハ. 慢慢的说道 (ゆっくり言った)

以上の例にあるように、同じく副詞接尾辞として1926年の作品《铸剑》において“地”、1934年の作品《非攻》では“的”というようになっている。一旦使い分けをしていた“的”と“地”がまた最初の“的”だけに戻っていた具体的な時期について、《二心集》を見るとほぼ特定することができる。表からでも分かるように、《“民族主义文学”的任务和命运》という1931年10月に書かれた作品を境目に“的”の用法が戻っている。

また、《二心集》において、“底”の用法が目立つ。その具体的な例は次の通りである。

《《艺术论》译本序》(1930年6月)のなかの“底”の用例：

- a. 无政府主义底社会的组织 (無政府主義な社会の組織)
- b. 从事于政治底斗争 (政治的な闘争に従事する)
- c. 却非一般底社会运动 (一般的な社会活動ではない)
- d. 反对获得政治底公民底自由 (政治的な公民の自由を獲得することを反対す)
- e. 还和他个人底地相知 (彼と個人的に知り合いである)
- f. 必然底地随此而起者，是资本主义之敌
(必然的にこれに随って起こるのは、資本主義の敵となる)
- g. 从哲学底领域方面 (哲学の領域から)
- h. 意识底的，真实的共产主义者 (意識的な、本当の共産主義者)

以上のように、“底” “底的” “底地”といった特殊な用法を数多く使用されている。意味的、文法的にどのように理解したらいいかはさらに詳しく調べる必要がある。

3. まとめ

本稿はこれまでに魯迅のテキストを手がかりに、その作品における副詞接尾辞としての“的”“地”の使い方について調べ、結果を表に表してみた。その調べた結果から次のようなことが言えるのではないだろうか。つまり、魯迅において、“的”“地”の使い分けについて、その最初の作品では混在していたのに対して、1924年以後、魯迅は区別して使用している。1925年から1930年までその使い分けがほぼ定着しているように見えたが、しかし、1931年10月以後また最初の未分化の状態に戻っている。1924年までの混在、1925年から1930年における使い分け、1931年以後の逆戻りがある。このどちらも意図的と見ることができるかどうか、これが第一の問題である。このような経過について、第二に、なぜ魯迅はいったん“的”の使い方を1925年から1929年にわたって綺麗に分けたのか、そうしたのにもかかわらず、1931年からなぜ再び元に戻っていたのだろうかという問題が生じる。更に広汎に見ると、彼と同時代の現代文学先駆者たちもみな同じくこのような経過をたどっていたのだろうか。もし異なるのであれば、それは何故だろうか。また、1930年の魯迅作品に目立つ“底”の用法をどう理解したらいいか。それと“的”の用法とに関連性があるのだろうか。これらの問題について、これから追求していきたい。

注

- 1 「欧化の文法」は、本稿では、王力が言う「欧化語法」とその中に含まれている文法面での欧化（本稿注4）を区別するために、後者を指して、筆者が用いた用語である。
- 2 「五・四」と白話との関係については、高田昭二著『中国近代文学論争史』（風間書房、1990年1月）、大原信一著『近代中国の言葉と文字』（東方書店、1994年）などを参照。この両書のなかで、「五・四」時期における胡適、陳独秀の活躍、この両者によって提唱された「文学革命」（白話文学を目指す）運動とその具体的な内容を紹介している。
- 3 大原信一著『近代中国語の言葉と文字』第5章、「白話文の欧化」（128頁）を参照。この章の冒頭で、著者はまず朱星氏『中国文学語言發展史略』（新華出版社1988年）で現代中国語文学語言の特徴としてあげた二点、つまり、「（一）新しい語彙の大量採用、（二）外国の句法の採用」を掲げ、続けて、「白話文の發展にあずかって力のあった要素として、第一に旧白話の伝統、第二に文言文の伝統、第三に外来的表現の摂取が挙げられる」と述べている。「欧化語法」についての詳しい説明は、『王力文集』（山東省教育出版社、1982年）に収められている『現代語法』第6章と『語法理論』第6章を参照。『現代語法』と『語法理論』は姉妹編で、

同じような構成をとっている。どちらもはじめ5つの章において固有の語法を考察した後、第6章で「欧化語法」を取り挙げている。王力は欧化語法を浮き彫りにするために、現代中国語の基準としたのは主として《红楼梦》《儿女英雄传》である。このように基準を置くのは、この二小説は外来の影響を受けていない、中国固有の語法を保有している明清の白話小説であることから由来していると考えられる。本稿において、白話文の発展に力のあった要素として挙げている「旧白話」とは《红楼梦》《儿女英雄传》のような明清の小説のことである。

- 4 王力は「欧化語法」について、「西洋語法の影響を受けて生まれた中国の新語法を、我々は欧化語法と呼ぶ」と定義している。これを踏まえたうえで、大原信一氏は「白話文の欧化」（前掲注1）で、「外国語（日本語も含まれる）の語彙・語法・言い回しの影響を受けて発達した、中国の新しい文体や語法を便宜上一括して欧化文体・欧化語法と呼ぶ」と定義している。本稿は後者の定義を採用している。なお、大原氏はまた次のように言っている。「欧化」とは印欧語族に属する諸言語の影響を受けたという意味に解したいが、実は英語からの影響が圧倒的に多い」と。
- 5 「翻訳についての通信」（1931年12月28日、《二心集》）：最初に発表されたのは1932年6月《文学月报》第一卷第一号。発表当初の題は《论翻译》（翻訳を論ず）、副題は《答 J. K. 论翻译》（J. K. に答える 翻訳を論ず）であった。ここの「J. K.」は即ち瞿秋白である。彼は魯迅に《论翻译》という題の手紙を、1931年12月11日、25日《十字街头》第一、二期に掲載し、魯迅訳の《毁灭》《铁流》にたいし、その翻訳についての意見を提示している。本稿での引用は魯迅の瞿秋白に対する返信で、自らの翻訳観について述べたものである。このほか、魯迅の翻訳に関する見解は、梁実秋の《魯迅先生的“硬译”》（『魯迅先生の硬訳を論ず』）に答えた《“硬译”与“文学的阶级性”》（『「硬訳」と「文学の階級性」』）（最初に発表されたのは1930年3月上海《萌芽月刊》第一卷第三期）にも示されている。「欧化の文法を中国の文章に取り入れることが不可欠だ」という主張が一貫している。
- 6 《王力文集》（前掲注2）で、王力は次のように述べている（433頁）。「欧化の文法は欧化の語彙とはっきり区別する必要がある。例えば、“这种工作太机械”（このような仕事は機械的過ぎる）という文において、“机械”（機械的）という二字は欧化の語彙であるが、欧化の文法は無い。また、欧化の文法と欧化風な言い回しともはっきり区別しなければならない。例えば、“书籍是人类的精神食粮”（本は人類にとっての精神的糧である）という文において、“食粮”に“精神的”というのは欧化風のものであって、文法にいささかの影響は無い。今の中国語の文章においての欧化は、語彙や欧化風な言い回しのものが多く、文法のものはいささかの影響は無い。」（中略）「一般大衆は欧化の語彙を比較的受け入れられやすい傾向がある。例えば、“摩登”（モダン）、“生活”（生活）はすでに口語に浸透している。文法の欧化が最も難しい。これは歴史において語義の変遷が大きいのに対して、文法の変遷が小さいのと同じ道理である。」と。このように、欧化語彙、欧化風の言い回し、欧化文法をはっきり区別する必要性を主張し、そのうえで、欧化語彙のほうが比較的取り入れられやすいことを述べている。

- 7 《王力文集》(前掲注2) 第6章を参照。この章で王力は第41節～第47節にわたって、欧化の文法を7種類に分類して各節に分けて説明している。
- 8 《王力文集》(前掲注2) “記号的欧化” という節(463頁)で、王力は“的”の今までの使い方についてまとめている。
- 9 《王力文集》(前掲注2) 42頁に以下のような説明がある。「品とは語と語のあいだにおける関係による主次地位のことである。例えば“白马”という語は、“馬”が主要語で、“白”はそれを修飾する成分である。という意味で、“白”は“馬”より地位が低いと見なされ、“馬”は首品、“白”は「次品」となる。また、“纯白之馬”という語の場合は、“纯”は“白”を修飾する成分で、「次品」の“白”よりもさらに地位が低いので「末品」と呼ぶ。」と。「次品」と「末品」は文言文を考えるとときに用いられる概念であって、現代中国語の文法を分析するときに用いられる用語ではない。
- 10 《王力文集》(前掲注2) 463頁。宋代の文章における“底”と“地”の使い分けについて、前者は宋代の人の語録にたくさんあるとし、後者についてだけ例を挙げている。
- (A) 今言道无不在，无适而非道，固是；只是死搭搭地。惟说鸢飞鱼跃，则活活泼泼地（《朱子语录》）
- 上の文の中の“死搭搭地”とは、活気が無い様子。“活活泼泼地”とは、生き生きとしている様子。文の意味は次のようである。「今道はすべてのところにある、そうでないものは道ではないというのは確かに正しい。ただその言い方は生き生きとしていない。しかし鸢が飛ぶことや魚が躍ることを説くと、生き生きとしてくる。」
- (B) 义理尽无穷，前人恁地说亦未必尽（《朱子全书・学》）
- “恁地”とは「このように」という意。文の意味は次のようである。「義理は尽きることが無い。昔の人がこのように言うのも未だ足りない。」
- 11 《王力文集》(前掲注2) 464頁。元曲《玉镜台》の文が例に挙げられている。“若不恁的呵，不济事”（このようにしなければ、だめです）注10の例文(B)を参考にすると、同じく「このように」という意味で宋代の“恁地”に代わって元曲では“恁的”が使われている。
- 12 《王力文集》(前掲注2) 464頁。「欧文の影響を受けて」という一文がある。これは、外国語（日本語も含まれる）の形容詞と副詞に語尾の変化があるのに対して、中国語にそのような区別としての記号が無いことを指していると思われる。
- 13 《狂人日记》: 最初に発表されたのは1918年5月《新青年》第4巻第5号。《狂人日记》についての評価は藤井省三著『魯迅事典』（三省堂、2002年4月）、大原信一著『近代中国の言葉と文字』（東方書店、1994年）などを参照。
- 14 本稿で扱う魯迅の作品は《魯迅全集》（人民文学出版社全20巻、1973年）を底本としている。許広平（魯迅夫人にあたる人）が「魯迅全集編校後記」で記しているように、「字の使い方について、同人達は魯迅文学の真の姿を示さんがために、すべて先生（魯迅）が好んで使ったものを用いることにした」（1938年7月7日）とある。このことは本稿が底本としている1973年版《魯迅全集》においても変わ

りが無い。つまり、“的”“地”の使い方についても魯迅が用いたそのままの形を取っていると考えられる。

- 15 《王力文集》(前掲注2) 464頁。“的”と“底”の使い分けに関する議論について次のように説明をしている。「英語の「instinctive」と「of instinct」は「五・四」以前は区別無く“本能的”と訳されていた。しかし「五・四」以後、この区別を表すために、前者を“本能底”、後者を“本能的”と訳すように提言する人たちと、前者を“本能的”、後者を“本能底”という、正反対な意見を唱える人たちがいた。しかし、この両方の意見はいずれも定着することが無かった。」と。
- 16 魯迅作品の執筆年について、『魯迅著訳書年表』(学習研究社、1986年8月)を基準としている。

参考文献

- 竹内好著『魯迅』(未来社、1961年5月)
丸山昇著『魯迅—その文学と革命—』(東洋文庫47、平凡社、1965年7月)
日本語版『魯迅全集』(学習研究社全20巻、1984年11月～1986年8月)
中国語版《魯迅全集》(人民文学出版社全20巻、1973年)
高田昭二著『中国近代文学論争史』(風間書房、1990年1月)
趙遐秋・曾慶瑞著《中国現代小説史》上巻(中国人民大学出版社、1984年3月)
趙遐秋・曾慶瑞著《中国現代小説史》上巻(中国人民大学出版社、1985年7月)
王力著《王力文集》第一集(山東省教育出版社、1984年)
王力著《王力文集》第二集(山東省教育出版社、1984年)
大原信一著
『近代中国の言葉と文字』(東方書店、1994年)
『梁啓超の新文体と徳富蘇峯』(その一)(東洋研究)
『中国語に入った日本語』(東洋研究78)
『三〇年代中国の文章』(東洋研究82)
『五四白話文と欧化語法』(一)(東洋研究90)
『五四白話文と欧化語法』(一)(東洋研究94)
『中国新民主主義革命期に刊行された新三字経について』(東洋研究123)
『中国の識字問題(その一)』(東洋研究125)
『中国の近代用語事始め——フライヤーと梁啓超の訳書論』(東洋研究134)
『30年代中国の大衆語論争』(同志社外国文学研究58)
『中国の識字問題』(同志社外国文学研究64)
『胡適と白話・国語運動』(同志社外国文学研究66)
『白話文の欧化』(同志社外国文学研究66)
『白話文の欧化』(承前)(同志社外国文学研究66)
李国棟著『魯迅と漱石の比較文化的研究』(東京明治書院)
藤井省三著『魯迅事典』(三省堂、2002年4月)
馬西尼著〔伊〕《現代漢語词汇的形成—19世紀漢語外来語研究》(漢語大辭典出版社、1997年9月)